

おじいさんの
ランプ

新美南吉



かくれんぼで、倉の隅にもぐりこんだ東一君がランプを持って出て来た。

それは珍らしい形のランプであつた。八十糎センチぐらいの太い竹の筒つつが台になつていて、その上にちよつぴり火のともる部分がくつついてある、そしてほやは、細いガラスの筒であつた。はじめで見るものにはランプとは思えないほどだつた。

そこでみんなは、昔の鉄砲とまちがえてしまった。

「何だア、鉄砲かア」と鬼の宗八君そうはちはいつた。

東一君のおじいさんも、しばらくそれが何だかわからなかつた。眼鏡めがね越しごにじつと見ていてから、はじめてわかつたのである。

ランプであることがわかると、東一君のおじいさんはこういつて子供たちを叱しかりはじめた。

「こらこら、お前たちは何を持出すか。まことに子供というものは、黙って遊ばせておけば何を持出すやらわけのわからん、油断もすきもない、ぬすつと猫ねこのようなものだ。こらこら、それはここへ持つて来て、お前たちは外へ行って遊んで来い。外に行けば、電信柱でんしんぽうしゅうでも何でも遊ぶものはいくらでもあるに」

こうして叱られると子供ははじめて、自分がよくない行いをしたことがわかるのである。そこで、ランプを持出した東一君はもちろんのこと、何も持出さなかつた近所の子供たちも、自分たちみんなで悪いことをしたような顔をして、すぐすごと外の道へ出ていった。

外には、春の昼の風が、ときおり道のほこりを吹立ててすぎ、のろのろと牛車を通つたあとを、白い蝶ちようがいそがしそうに通つてゆくこともあつた。なるほど電信柱があつちこつちに立つてい

る。しかし子供たちは電信柱なんかで遊びはしなかった。大人おとなが、こうして遊べとといったことを、いわれたままに遊ぶというのは何となくばかげているように子供には思えるのである。

そこで子供たちは、ポケットの中のラムネ玉をカチカチいわせながら、広場の方へとんでいった。そしてまもなく自分たちの遊びで、さっきのランプのことは忘れてしまった。

日ぐれに東一君は家へ帰つて来た。奥の居間いまのすみに、あのランプがおいてあった。しかし、ランプのことを何かいうと、またおじいさんにかみがみいわれるかも知れないので、黙っていた。

夕御飯のあとの退屈な時間が来た。東一君はたんすにもたれて、ひき出しのかんかんをカタンカタンといわせていたり、店に出てひげを生はやした農学校の先生が『大根栽培だいこんの理論と実際』と

いうような、むつかしい名前の本を番頭に注文するところを、じつと見ていたりした。

そういうことにも飽くと、また奥の居間にもどつて来て、おじいさんがいないのを見すまして、ランプのそばへにじりより、そのほやをはずしてみたり、五銭白銅貨はくどうかほどのねじねをまわして、ランプの芯しんを出したりひっこめたりしていた。

すこしいつしようけんめいになっていじくつていると、またおじいさんにみつかつてしまった。けれどこんどはおじいさんは叱ならなかつた。ねえやにお茶をいいつけておいて、すつぽんと煙管筒きせるづつをぬきながら、こういつた。

「東坊、このランプはな、おじいさんにはとてもなつかしいものだ。長いあいだ忘れておつたが、きょう東坊が倉の隅から持出して来たので、また昔のことを思い出したよ。こうおじいさ

んみたいに年をとると、ランプでも何でも昔のものに出合うのがとても嬉しいもんだ」

東一君はほかんとしておじいさんの顔を見ていた。おじいさんはがみがみと叱りつけたから、怒おこっていたのかと思つたら、昔のランプに逢あうことができて喜んでいたのである。

「ひとつ昔の話をしてやるから、ここへ来て坐すわれ」とおじいさんがいった。

東一君は話が好きだから、いわれるままにおじいさんの前へいつて坐つたが、何だかお説教をされるときのようで、いごこちがよくないので、いつもうちで話をきくときにとる姿勢をとつて聞くことにした。つまり、寝そべつて両足をうしろへ立てて、ときどき足の裏をうちあわせる芸当げいとウをしたのである。

おじいさんの話というのは次のようであつた。

今から五十年ぐらいまえ、ちやうど日露戦争のじぶんのことである。岩滑新田やなべしんでんの村に巳之助みのすけという十三の少年がいた。

巳之助は、父母も兄弟もなく、親戚しんせきのものとして一人もない、まったくのみなしごであつた。そこで巳之助は、よその家の走り使いをしたり、女の子のように子守こもりをしたり、米を搗ついてあげたり、そのほか、巳之助のような少年にできることなら何でもして、村に置いてもらつていた。

けれども巳之助は、こうして村の人々の御世話で生きてゆくことは、ほんとうをいえばいやであつた。子守をしたり、米を搗ついたりして一生を送るとするなら、男とうまれた甲斐かがないと、つねづね思つていた。

男子は身を立てねばならない。しかしどうして身を立てるか。

巳之助は毎日、ご飯を喰べてゆくのがやつとのことであつた。本一冊買うお金もなかつたし、またたといお金があつて本を買つたとしても、読むひまがなかつた。

身を立てるのによいきっかけがないものかと、巳之助はころひそかに待つていた。

すると或る夏の日のひるさがり、巳之助は人力車の先綱を頼まれた。

その頃岩滑新田には、いつも二、三人の人力曳がいた。潮湯治しおとうじ（海水浴のこと）に名古屋から来る客は、たいてい汽車で半田はんだまで来て、半田から知多半島西海岸の大野や新舞子まで人力車でゆられていったもので、岩滑新田はちょうどその道すじにあつていたからである。

人力車は人が曳くのだからあまり速くは走らない。それに、

岩滑新田と大野の間には峠とうげが一つあるから、よけい時間がかか
る。おまけにその頃の人力車の輪は、ガラガラと鳴る重い鉄輪かねわ
だったのである。そこで、急ぎの客は、賃銀を倍出ばいだして、二人
の人力曳にひいてもらうのであった。巳之助に先綱曳を頼んだ
のも、急ぎの避暑客であつた。

巳之助は人力車のなながええにつなつながれた綱を肩にかついで、夏
の入陽いりひのじりじり照りつける道を、えいやえいやと走つた。馴な
れないこととてたいそう苦しかった。しかし巳之助は苦しきな
ど気にしなかつた。好奇心でいっぱいだった。なぜなら巳之助
は、物ごころがついてから、村を一步も出たことがなく、峠の向
こうにどんな町があり、どんな人々が住んでいるか知らなかつ
たからである。

日が暮れて青い夕闇ゆうやみの中を人々がほの白くあちこちする頃、

人力車は大野の町にはいった。

巳之助はその町でいろいろな物をはじめて見た。軒のきをならべて続いている大きい商店が、第一、巳之助には珍らしかった。巳之助の村にはあきないやとては一軒しかなかった。駄菓子だがし、草鞋わらじ、糸繰りの道具、膏藥こうやく、貝殻かいがらにはいった目薬、そのほか村で使っていたいの物を売っている小さな店が一軒きりしかなかったのである。

しかし巳之助をいちばんおどろかしたのは、その大きな商店が、一つ一つともしている、花のように明かるいガラスのランプであつた。巳之助の村では夜はあかりなしの家が多かつた。まっくらな家の中を、人々は盲のように手でさぐりながら、水甕みずがめや、石臼いしうすや大黒柱だいこくばしらをさぐりあてるのであつた。すこしぜいたくな家では、おかみさんが嫁入りよめいのとき持つて来た行燈あんどんを使うの

であつた。行燈は紙を四方に張りめぐらした中に、油のはいつた皿さらがあつて、その皿のふちにのぞいてゐる燈心とうしんに、桜の蒼つぼみぐらいの小さいほのおがともると、まわりの紙にみかん色のあたたかな光がさし、附近は少し明かるくなつたのである。しかしどんな行燈にしる、巳之助が大野の町で見たランプの明かるさにはとても及ばなかつた。

それにランプは、その頃としてはまだ珍らしいガラスでできていた。煤すすけたり、破れたりしやすい紙でできている行燈より、これだけでも巳之助にはいいもののように思われた。

このランプのために、大野の町ぜんたいが竜宮城かなにかのように明かるく感じられた。もう巳之助は自分の村へ帰りたくないときえ思つた。人間は誰でも明かるいところから暗いところへ帰るのを好まないのである。

巳之助は駄賃だちんの十五銭を貰もらうと、人力車とも別れてしまつて、お酒にでも酔つたように、波の音のたえまないこの海辺の町を、珍らしい商店をのぞき、美しく明かるいランプに見とれて、さまよつていた。

呉服屋では、番頭ばんとうさんが、椿つばきの花を大きく染め出した反物たんものを、ランプの光の下にひろげて客に見せていた。穀屋こくやでは、小僧さんがランプの下で小豆あずきのわるいのを一粒ずつ拾い出していた。また或る家では女の子が、ランプの光の下に白くひかる貝殻たまを散らしておはじきをしていた。また或る店ではこまかい珠たまに糸を通して数珠じゆずをつくつていた。ランプの青やかな光のもとでは、人々のこうした生活も、物語か幻燈げんとうの世界でのように美しくなつかしく見えた。

巳之助は今までなんども、「文明開化で世の中がひらけた」と

いうことをきいていたが、今はじめて文明開化ということがわかったような気がした。

歩いているうちに、巳之助は、様々なランプをたくさん吊つるしてある店のまえに來た。これはランプを売っている店にちがいない。

巳之助はしばらくその店のまえで十五錢を握りしめながらためらっていたが、やがて決心してつかつかとはいつていつた。

「ああいうものを売ってくれや」

と巳之助はランプをゆびさしていつた。まだランプという言葉を知らなかつたのである。

店の人は、巳之助がゆびさした大きい吊つりランプをはずして來たが、それは十五錢では買えなかつた。

「負けとくれや」

と巳之助はいった。

「そうは負からん」

と店の人は答えた。

「卸値おろしねで売つとくれや」

巳之助は村の雑貨屋へ、作つた草鞋わらじを買ってもらいによく行つたので、物には卸値と小売値こうりねがあつて、卸値は安いということを知っていた。たとえば、村の雑貨屋は、巳之助の作つた瓢箪型ひょうたんがたの草鞋を卸値の一銭五厘りんで買いつつて、人力曳じんりきひきたちに小売値の二銭五厘で売つていたのである。

ランプ屋の主人は、見も知らぬどこかの小僧がそんなことをいったので、びつくりしてまじまじと巳之助の顔を見た。そしていった。

「卸値で売れつて、そりゃ相手がランプを売る家なら卸値で売つ

てあげてもいいが、一人一人のお客に卸値で売るわけにはいかなな

「ランプ屋なら卸値で売ってくれるだのイ？」

「ああ」

「そんなら、おれ、ランプ屋だ。卸値で売ってくれ」

店の人はランプを持ったまま笑い出した。

「おめえがランプ屋？　はッはッはッはッ」

「ほんとうだよ、おツつあん。おれ、ほんとうにこれからランプ屋になるんだ。な、だから頼むに、今日きょうは一つだけ卸値で売ってくれや。こんど来るときや、たくさん、いつぺんに買うで」

店の人ははじめ笑っていたが、巳之助の真剣なようすに動かされて、いろいろ巳之助の身の上をきいたうえ、

「よし、そんなら卸値でこいつを売ってやろう。ほんとは卸値でもこのランプは十五銭じゃ売れないけど、おめえの熱心なのに感心した。負けてやろう。そのかわりしつかりしようばいをやれよ。うちのランプをどんどん持つてつて売ってくれ」といつて、ランプを巳之助に渡した。

巳之助はランプのあつかい方を一通り教えてもらい、ついでに提燈ちようちんがわりにそのランプをともして、村へむかった。

藪やぶや松林のうちつづく暗い峠道でも、巳之助はもう恐こわくはなかつた。花のように明かるいランプをさげていたからである。

巳之助の胸の中にも、もう一つのランプがともっていた。文明開化に遅れた自分の暗い村に、このすばらしい文明の利器を売りこんで、村人たちの生活を明かるくしてやろうという希望のランプが――

巳之助の新しいしょうばいは、はじめのうちまるではやらなかつた。百姓たちは何でも新しいものを信用しないからである。そこで巳之助はいろいろ考えたあげく、村で一軒きりのあきないやへそのランプを持って行って、ただで貸してあげるからしばらくこれを使って下さいと頼んだ。

雑貨屋の婆ばあさんは、しぶしぶ承知して、店の天井に釘くぎを打つてランプを吊し、その晩からともした。

五日ほどたって、巳之助が草鞋を買ってもらいに行くと、雑貨屋の婆さんはにこにこしながら、こりやたいへん便利で明かるうて、夜でもお客がよう来てくれるし、釣つり銭せんをまちがえることもないので、気に入ったから買いましょう、といった。その上、ランプのよいことがはじめてわかつた村人から、もう三つ

も注文のあつたことを巳之助にきかしてくれた。巳之助はとびたつように喜んだ。

そこで雑貨屋の婆さんからランプの代と草鞋の代を受けとると、すぐその足で、走るようにして大野へいった。そしてランプ屋の主人にわけを話して、足りないところは貸してもらい、三つのランプを買つて来て、注文した人に売つた。

これから巳之助のしょうばいははやつて来た。

はじめは注文をうけただけ大野へ買いにいつていたが、少し金がたまると、注文はなくてもたくさん買いこんで来た。

そして今はもう、よその家の走り使いや子守をすることはやめて、ただランプを売るしょうばいだけにうちこんだ。物干台ものほしだいのようなわくのついた車をしたてて、それにランプやほやなどをいつぱい吊し、ガラスの触れあう涼しい音をさせながら、巳

之助は自分の村や附近の村々へ売りにいった。

巳之助はお金も儲もうかったが、それとは別に、このしようばいがたのしかつた。今まで暗かつた家に、だんだん巳之助の売つたランプがともつてゆくのである。暗い家に、巳之助は文明開化の明かるい火を一つ一つともしてゆくような気がした。

巳之助はもう青年になつていた。それまでは自分の家とてはなく、区長さんのところの軒のかたむいた納屋なやに住ませてもらつていたのだが、小金がたまつたので、自分の家もつくつた。すると世話してくれる人があつたのでお嫁よめさんももらった。

或あるとき、よその村でランプの宣伝をしておつて、「ランプの下たなら畳たたみの上に新聞をおいて読むことが出来るのイ」と区長さんに以前いぜんきいていたことをいうと、お客さんの一人が「ほんとかん？」とききかえしたので、嘘うそのきらいな巳之助は、自分で

ためして見る気になり、区長さんのところから古新聞をもらつて来て、ランプの下にひろげた。

やはり区長さんのいわれたことはほんとうであつた。新聞のこまかい字がランプの光で一つ一つはつきり見えた。「わしは嘘をいってしようばいをしたことにはならない」と巳之助はひとりごとをいった。しかし巳之助は、字がランプの光ではつきり見えても何にもならなかつた。字を読むことができなかつたからである。

「ランプで物はよく見えるようになったが、字が読めないじゃ、まだほんとうの文明開化じゃねえ」

そういつて巳之助は、それから毎晩区長さんのところへ字を教えてもらいにいった。

熱心だつたので一年もすると、巳之助は尋常科じんじょうかを卒業した村

人の誰にも負けないくらい読めるようになった。

そして巳之助は書物しよもつを読むことをおぼえた。

巳之助はもう、男ざかりの大人おとなであつた。家には子供が二人あつた。「自分もこれでどうやらひとり立ちができたわけだ。まだ身を立てるといふところまではいつていないけれども」と、ときどき思つて見て、そのつど心に満足を感じるのであつた。

さて或る日、巳之助がランプの芯しんを仕入れに大野の町へやつて来ると、五、六人の人夫にんぶが道のはたに穴を堀り、太い長い柱を立てているのを見た。その柱の上の方には腕のような木が二本ついでいて、その腕木には白い瀬戸物のだるまさんのようなものがいくつかのつていた。こんな奇妙なものを道のわきに立てて何にするのだらう、と思ひながら少し先にゆくと、また道

ばたに同じような高い柱が立っていて、それには雀すずめが腕木にとまつて鳴いていた。

この奇妙な高い柱は五十米メートルぐらい間をおいては、道のわきに立っていた。

巳之助はついに、ひなたでうどんを乾ほしている人にきいてみた。すると、うどんやは「電気とやらいうもんが今度ひけるだけな。そいでもう、ランプはいらんようになるだけな」と答えた。

巳之助にはよくのみこめなかつた。電気のことなどまるで知らなかつたからだ。ランプの代りになるものらしいのだが、そうとすれば、電気というものはあかりにちがいあるまい。あかりなら、家の中にもせばいいわけで、何もあんなとてつもない柱を道のくろに何本もおつ立てることはないじゃないかと、

巳之助は思つたのである。

それから一月ひとしきほどたつて、巳之助がまた大野へ行くと、この間立てられた道のはたの太い柱には、黒い綱のようなものが数本わたされてあつた。黒い綱は、柱の腕木にのつているだるまさんの頭を一まきして次の柱へわたされ、そこでまただるまさんの頭を一まきして次の柱にわたされ、こうしてどこまでもつづいていた。

注意してよく見ると、ところどころの柱から黒い綱が二本ずつだるまさんの頭のところのきばで別れて、家の軒端のきばにつながれているのであつた。

「へへえ、電気とやらいうもんはあ、かりがともるもんかと思つたら、これはまるで綱じゃねえか。雀つばめや燕のええ休み場というもんよ」

と曰之助が一人であざわらいながら、知合いの甘酒屋にはいつてゆくと、いつも土間どまのまん中の飯台の上に吊してあつた大きなランプが、横の壁の辺に取りかたづけられて、あとにはそのランプをずっと小さくしたような、石油入れのついていない、変なかつこうのランプが、丈夫じょうぶそうな綱で天井からぶらさげられてあつた。

「何だやい、変なものを吊したじゃねえか。あのランプはどこか悪くでもなつたかやい」

と曰之助はきいた。すると甘酒屋が、

「ありや、こんどひけた電気というもんだ。火事の心配がのうて、明かるうて、マッチはいらぬし、なかなか便利なもんだ」と答えた。

「ヘッ、へんて、これんなものをぶらさげたもんよ。これじゃ甘

酒屋の店も何だか間がぬけてしまった。客もへるだろうよ」

甘酒屋は、相手がランプ売であることに気がついたので、電燈の便利なことはもういわなかつた。

「なア、甘酒屋のとツつあん。見なよ、あの天井のところを。ながねんのランプの煤すすであそこだけ真黒になつとるに。ランプはもうあそこにいついてしまったんだ。今になつて電気たらいう便利なもんができたからとて、あそこからはずされて、あんな壁のすみつこにひっかけられるのは、ランプがかわいそうよ」

こんなふうには、巳之助はランプの肩をもつて、電燈のよいことはみとめなかつた。

ところでまもなく晩になつて、誰もマツチ一本すらなかつたのに、とつぜん甘酒屋の店が真昼のように明かるくなつたので、巳之助はびつくりした。あまり明かるいので、巳之助は思わず

うしろをふりむいて見たほどだった。

「巳之さん、これが電気だよ」

巳之助は齒をくいしばって、ながいあいだ電燈を見つめていた。敵かたきでも睨にらんでいるようなかおつきであった。あまり見つめていて眼のたまが痛くなったほどだった。

「巳之さん、そういつちや何だが、とてもランプで太刀たちうちはできなないよ。ちよつと外へくびを出して町通りを見てごらんよ」

巳之助はむつつりと入口の障子しょうじをあけて、通りをながめた。

どこの家どこの店にも、甘酒屋のと同じように明かるい電燈がともっていた。光は家の中にあまつて、道の上にまでこぼれ出していた。ランプを見なれていた巳之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。巳之助は、くやしさに肩でいきをしながら、これも長い間ながめていた。

ランプの、てごわいかたきが出て来たわい、と思つた。いぜんには文明開化ということをよく言つていた巳之助だつたけれど、電燈がランプよりいちだん進んだ文明開化の利器であるということとは分らなかつた。りこうな人でも、自分が職を失うかどうかというようなときには、物事の判断が正しくつかなくなることがあるものだ。

その日から巳之助は、電燈が自分の村にもひかれるようになつて、心ひそかにおそれていた。電燈がともるようになれば、村人たちはみんなランプを、あの甘酒屋のしたように壁の隅につるすか、倉の二階にでもしまひこんでしまふだろう。ランプ屋のしょうばいはいらなくなるだろう。

だが、ランプできえ村へはいつて来るにはかなりめんどうだつたから、電燈となつては村人たちはこわがつて、なかなか寄せ

つけることではあるまい、と巳之助は、一方では安心もしていた。

しかし間もなく、「こんどの村会で、村に電燈を引くかどうかを決めるだけな」という噂うわさをきいたときには、巳之助は脳天に一撃をくらったような気がした。強敵いよいよござんなれ、と思つた。

そこで巳之助は黙つてはいられなかつた。村の人々の間に、電燈反対の意見をまくしたてた。

「電氣というものは、長い線で山の奥からひつぱつて来るものだでのイ、その線をば夜中に狐きつねや狸たぬきがつたつて来て、この近きんぺんの田畠たはたを荒らすことはうけあいだね」

こういうばかばかしいことを巳之助は、自分の馴なれたしよろばいを守るためにいうのであつた。それをいうとき何かうしろ

めたい気がしたけれども。

村会がすんで、いよいよ岩滑新田やなべしんでんの村にも電燈をひくことになりましたと聞かされたときにも、巳之助は脳天に一撃をくらったような気がした。こうたびたび一撃をくらってはたまらない、頭がどうかなってしまふ、と思つた。

その通りであつた。頭がどうかなってしまった。村会のあとで三日間、巳之助は昼間もふとんをひつかぶつて寝ていた。その間に頭の調子が狂つてしまつたのだ。

巳之助は誰かを怨うらみたくてたまらなかつた。そこで村会で議長の役をした区長さんを怨むことにした。そして区長さんを怨まねばならぬわけをいろいろ考へた。へいぜいは頭の良い人でも、しようばいを失うかどうかというようなせとぎわでは、正しい判断をうしなうものである。とんでもない怨いだみを抱くよう

になるものである。

菜の花ばたの、あたたかい月夜であつた。どこかの村で春祭の支度したくに打つ太鼓がとほとほと聞えて来た。

巳之助は道を通つてゆかなかつた。みぞの中を馳いたちのように身をかがめて走つたり、藪やぶの中を捨犬のようにかきわけたりしていった。他人に見られたくないとき、人はこうするものだ。

区長さんの家には長い間やつかいになつていたので、よくその様子はわかつていた。火をつけるにいちばん都合のよいのは藁屋根わらやねの牛小屋であることは、もう家を出るときから考えていた。

母屋おもやはもうひっそり寝しずまっていた。牛小屋もしずかだつた。しずかだといつて、牛は眠っているかめざめているかわかつ

たもんじやない。牛は起きていても寝ていてもしずかなものだから。もつとも牛が眼めをさましていたって、火をつけるにはいっこうさしつかえないわけだけれども。

巳之助はマツチのかわりに、マツチがまだなかつたじぶん使われていた火打ひうちの道具を持って来た。家を出るとき、かまどのあたりでマツチを探さがしたが、どうしたわけかなかなか見つからないので、手にあたったのをさいわい、火打の道具を持って来たのだった。

巳之助は火打で火を切りはじめた。火花は飛んだが、ほくち、がしめっているのか、ちつとも燃えあがらないのであった。巳之助は火打というものは、あまり便利なものではないと思った。火が出ないくせにカチカチと大きな音ばかりして、これでは寝ている人が眼をさましてしまふのである。

「ちえッ」と巳之助は舌打ちしていった。「マッチを持って来りやよかつた。こげな火打みてえな古くせえもなア、いざというとき間にあわねえだなア」

そういつてしまつて巳之助は、ふと自分の言葉をききとがめた。

「古くせえもなア、いざというとき間にあわねえ、……古くせえもなア間にあわねえ……」

ちようど月が出て空が明かるくなるように、巳之助の頭がこの言葉をきつかけにして明かるく晴れて来た。

巳之助は、今になつて、自分のまちがつていたことがはつきりとわかつた。——ランプはもはや古い道具になつたのである。電燈という新しいいつそう便利な道具の世の中になつたのである。それだけ世の中がひらけたのである。文明開化が進んだの

である。巳之助もまた日本のお国の人間なら、日本がこれだけ進んだことを喜んでいいはずなのだ。古い自分のしょうばいが失われるからとて、世の中の進むのにじゃましようとしたり、何の怨みもない人を怨んで火をつけようとしたのは、男として何という見苦しいぎまであつたことか。世の中が進んで、古いしょうばいがいらなくなれば、男らしく、すつぱりそのしょうばいは棄^すてて、世の中のためになる新しいしょうばいにかわろうじゃないか。——

巳之助はすぐ家へとつてかえした。

そしてそれからどうしたか。

寝ているおかみさんを起して、今家にあるすべてのランプに石油をつがせた。

おかみさんは、こんな夜更^{よふ}けに何をするつもりか巳之助にき

いたが、巳之助は自分がこれからしようとしていることをきかせれば、おかみさんが止めるにきまつているので、黙っていた。ランプは大きさまがまのがみなで五十ぐらいあつた。それらみな石油をついだ。そしていつもあきないに出るときと同じように、車にそれらのランプをつるして、外に出た。こんどはマツチを忘れずに持つて。

道が西の峠とうげにさしかかるあたりに、半田池はんだいけという大きな池がある。春のことでいっぱいたたえた水が、月の下で銀盤のようにけぶり光っていた。池の岸にははんの木や柳が、水の中をのぞくようなかつこうで立っていた。

巳之助は人気ひとけのないここを選んで来た。さて巳之助はどうするとうのだらう。

巳之助はランプに火をともした。一つともしては、それを池

のふちの木の枝に吊した。小さいのも大きいのも、とりまぜて、木にいつぱい吊した。一本の木で吊しきれないと、そのとなり
の木に吊した。こうしてとうとうみんなのランプを三本の木に
吊した。

風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにまじろがず、燃
え、あたりは昼のように明かるくなった。あかりをしたって寄つ
て来た魚が、水の中にきらりきらりとナイフのように光った。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ」

と巳之助は一人でいった。しかし立去りかねて、ながいあいだ
両手を垂れたままランプの鈴なりになった木を見つめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月なじんで来
たランプ。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ」

それから巳之助は池のこちら側の往還おうかんに來た。まだランプは、向こう側の岸の上にみなともつていた。五十いくつがみなともつていた。そして水の上にも五十いくつの、さかさまのランプがともつていた。立ちどまつて巳之助は、そこでもながく見つめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。

やがて巳之助はかがんで、足もとから石ころを一つ拾った。そして、いちばん大きくともつているランプに狙ねらいをきだめて、力いっぱい投げた。パリーンと音がして、大きい火がひとつ消えた。

「お前たちの時世じせいはすぎた。世の中は進んだ」と巳之助はいった。そしてまた一つ石ころを拾った。二番目に大きかったランプが、パリーンと鳴つて消えた。

「世の中は進んだ。電気の時世になった」

三番目のランプを割ったとき、巳之助はなぜか涙がうかんで来て、もうランプに狙いねらいを定めることができなかつた。

こうして巳之助は今までのしょうばいをやめた。それから町に出て、新しいしょうばいをはじめた。本屋になつたのである。

*

「巳之助さんは今でもまだ本屋をしている。もつとも今じゃだ**いぶ**年とつたので、息子むすこが店はやっているがね」

と東一君のおじいさんは話をむすんで、冷めたお茶をすすった。巳之助さんというのは東一君のおじいさんのことなので、東一君はまじまじとおじいさんの顔を見た。いつの間にか東一君はおじいさんのまえに坐りなおして、おじいさんのひざに手をおいたりしていたのである。

「そいじゃ、残りの四十七のランプはどうした？」
と東一君はきいた。

「知らん。次の日、旅の人が見つけて持ってつたかも知れない」
「そいじゃ、家にはもう一つもランプなしになっちやった？」

「うん、ひとつもなし。この台ランプだけが残っていた」

とおじいさんは、ひるま東一君が持出したランプを見ていった。

「損しちゃったね。四十七も誰かに持ってかれちゃって」

と東一君がいった。

「うん損しちゃった。今から考えると、何もあんなことをせん
でもよかったとわしも思う。岩滑新田やなべしんでんに電燈がひけてからでも、

まだ五十ぐらいのランプはけっこう売れたんだからな。岩滑新

田ふかだにの南にある深谷ふかだになんという小さい村じゃ、まだ今でもランプ

を使っているし、ほかに、ずいぶんおそくまでランプを使つて

いた村は、あつたのさ。しかし何しろわしもあの頃は元気がよかつたんでな。思いついたら、深くも考えず、ぱっぱつとやつてしまつたんだ」

「馬鹿しちやつたね」

と東一君は孫だからえんりよなしにいった。

「うん、馬鹿しちやつた。しかしね、東坊——」

とおじいさんは、きせるを膝ひざの上でぎゅツと握りしめていった。

「わしのやり方は少し馬鹿だったが、わしのしょうばいのやめ方は、自分でいうのもなんだが、なかなかりっぱだつたと思うよ。わしの言いたいのはこうさ、日本がすすんで、自分の古いしょうばいがお役に立たなくなつたら、すっぱりそいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古いしょうばいにかじりついていたり、自分のしょうばいがやつていた昔の方がよかつたといつたり、

世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意気地のねえことは決してしないということだ」

東一君は黙つて、ながい間おじいさんの、小さいけれど意気のあらわれた顔をながめていた。やがて、いった。

「おじいさんはえらかつたんだねえ」

そしてなつかしむように、かたわらの古いランプを見た。

おじいさんのランプ

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店
1996（平成 8）年 7 月 16 日発行第 1 刷

入力：浜野智

校正：浜野智

1999 年 4 月 20 日公開

2004 年 2 月 19 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。